

西会津町の歴史　－尾野本編－

本文中に身分や職業、身体の障がい等に関する差別的な用語が記されている場合がありますが、史実や調査内容を忠実に報告する立場からそのまま使用したもので、これらの差別を決して容認するものではありません。

ご理解願います。

1. 龍蔵寺の由来と薬師堂の子育て石

龍蔵寺は、慶雲4年(707)に越後国村松生れの円心が蜷川庄本木村(今の萱本)に来て、草庵(尻平沢開山堂)を建て、太子像を安置したのが始まりである。

天平3年(731)4月7日、行基僧正が萱本村に来て、円心の草庵に泊まった。その夜、2人の夢に蓮台に座られた薬師如来が現れ、インドから興照菩薩が日本に渡り、薬師如来像を33体(66体とする文献もある。)作ったその1体が上総^{かずさ}国の法興寺に安置されていた。大宝3年(703)に越州の僧がこの像を盗み、ここまで来たが、飢えと疲れて死んで、薬師如来像をこの山に捨て置かれ29年の歳月がすぎた。

「お前たち、早く小さな堂を建てて安置せよ。必ず火災病苦を取り除いてやる」と告げられた。2人はこの夢から覚め、山に登ってみると1尺2分ほどの如来像が萱草の中に置かれてあった。行基は自分の袈裟に大切に包み、庵に帰った。このことを村人に話したら、みな集り、驚き拝んだ。

それから行基は別に同じ大きさの観音菩薩と地蔵菩薩を刻み、急いで2間4面の堂を建て安置した。山の形は伏した龍や象に似ており、南北に長い峯の山でありこの麓に1棟の寺を建て、「長岳山龍象寺」と名づけ円心が開山した。尻平沢開山堂に円心が開山されたときのものと思われる礎石と僧の墓石がある。

その後、何度か修復したが、大治3年(1128)にて寺も堂も朽ち果ててしまっ、修復が困難になったので、越後の塩沢生まれの僧惠玄が新たに堂を建立し、寺も長岳山龍蔵寺と呼ばれるようになった。

それから、幾多の盛衰があったと考えられるが、永禄12年(1569)3月15日、安養寺6世功山寶作和尚が当寺を中興するとある。

裏山には子安観音堂、薬師観音堂があり、萱本集落だけでなく近郷の村々の信仰も厚かったという。その薬師観音堂の後ろに子育て石が鎮座している。この子育て石に

は、次のような話が伝わっている。

昭和の初めの8月の祭礼の前夜、村人が酒を飲みながらお籠りをしていた。眠りについた夜更け、古老の夢枕に御仏がお立ちになり、「われはこの家の主である。これより南西の方10町の地に清流あり、その中ほどに埋もれたる『黒い石』がある。この石を祀り尊崇すれば、必ず幸福になるであろう」とお告げがあり、御仏の姿は消えてしまった。古老は夜の明けるのを待ち、寺の住職や村人たちと長谷川の岸辺を探したところ、御仏のお告げのどおり中河原地内に黒い石があった。掘りだしてみると、約800貫目(=3+)もある立派な石に一同は大変驚き、早速「子育て」と名前をつけて厳かに入魂式を行った。昭和6年旧暦12月8日の晴れた日に、降り積もった雪を踏みしめ「祝奉遷、子育て」と大書した幟を先頭に、若者や村人150人あまりの奉仕で「子育て」はそりで運ばれ、今の場所に安置された。この遷座作業に使われた長さ3mあまりの大櫓は村の棟梁齋藤一雄氏が作ったもので、櫓を引いた大引綱とともに、今も長岳山龍蔵寺に大切に保存されている。



龍蔵寺薬師堂

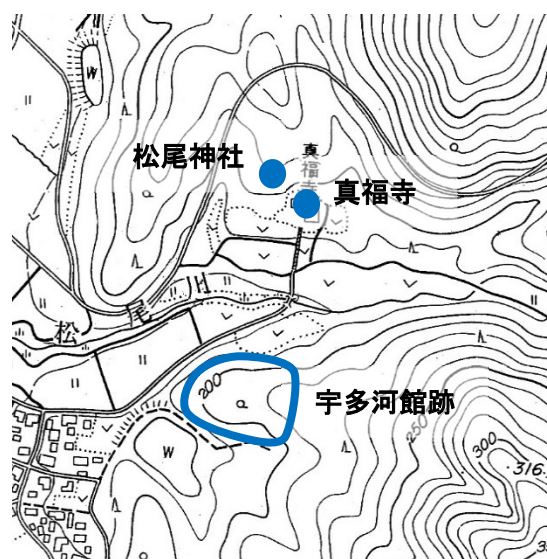
2. 宇多河氏ゆかりの社寺と城館跡

松尾山真福寺は、寺伝によると天平元年(729)、行基の開基と伝えられる。鎌倉寿福寺の僧慈心が鎌倉幕府の御家人で松尾村の地頭宇多河信濃守の合力を得て、文永6年(1269)に荒廃した七堂伽藍を修復し、最盛期には末寺三十七を持つ大寺院であったが、天正年間(1573～1591)、伊達政宗の兵火に係って諸堂を失い、廃寺となった。

その後、曹洞宗の僧明岩が時の津川城主の力を借りて慶長19年(1614)に上野国白井の双林寺の末寺として再興したと伝える。

松尾神社も宇多河信濃守が京都の松尾大社から勧請した神社とされ、県内唯一の酒造神・医薬神として信仰のある神社である。神井戸の御神水は靈験あらたかで、江戸時代中期以降、福島県及び新潟県の酒造元が参拝のうえ、種水として持ち帰るようになった。平成10年より上卯祭(お水取り神事)が再開され、県内酒造元が参列し、盛大に行われている。この他正月から半年間のケガレを祓い、残りの無病息災を願う夏越の大祓い茅の輪くぐり神事が例年6月下旬に行われている。神仏分離令以前は真福寺が別当を務めていた。

宇多河氏の館跡が真福寺の前の川向にあり、東西1丁余、南北40間。郭内は2段になっているが単郭式の館である。東と西に高さ3尺ほどの土塁をめぐらし、その外に幅1間の空堀があり土橋が残っていた。北側は松尾川に面する急崖であるが武者走りの形を残し、南と西に虎口があり、北の小道との出会い部分に自然石の石組が少し残っている。宇多河信濃守道忠の築館と伝えられるが築館の年代は不明である。



松尾神社の茅の輪くぐり神事

3. ^{かぶといし} 甲石と河童の伝説

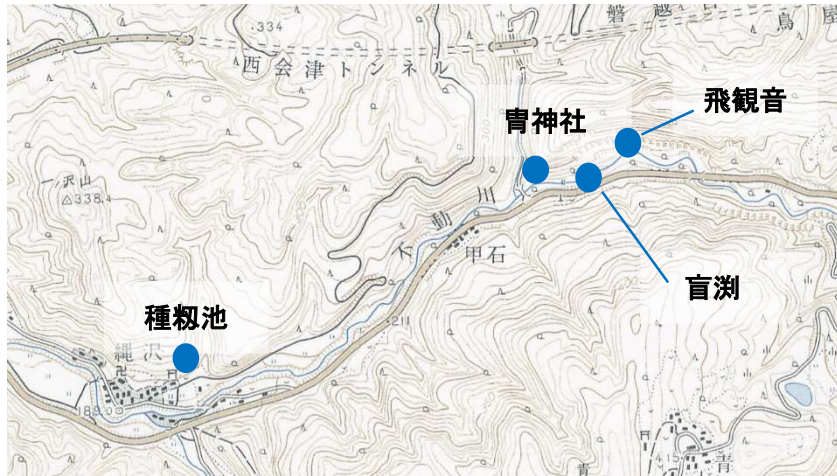
甲石はその昔、八幡太郎義家が休んだ所といわれ、冑を置いたところ、高さ1丈8尺、周り4丈の大きな岩になったといわれていたが、慶長の大地震で^{しころ}鋸という所が欠けて今はその半分が残ったといわれている。後年、甲石の裏の岩山を削り抜き冑神社として祀り現在にいたる。

この甲石周辺には、次のような河童の話が伝わっている。昔、甲石の石山にある飛観音付近に、^{めくらぶち}盲涿と呼ばれる底が測りしれない深い涿があった。ある晴れた日の暮れ方、村の喜四郎という者が野良仕事の帰りに、涿の川岸に飼葉桶を置いて、馬に水を飲ませ、少し離れた所で^{まぐさ}秣を刈って戻ってみると飼葉桶がひっくり返っていた。変だなと思い、元に戻そうとしたが動かない。困った喜四郎が仲間を呼んで力任せに引っ張ると、なんと中に赤ん坊のような不思議な生き物がへばりついてた。喜四郎たちは「なんだこれは！ 魔物だァ、打ち殺せェ！」と叫んで殺そうとした。するとこの生き物は逃げ回りながら「私は、この盲涿に住む河童です。決して悪いことはいたしません。ただ、この飼葉桶が欲しかっただけです。命を助けてくだされば、村の水難をなくします。私の力できっとやります。」と言うので、村人たちは哀れに思い、河童を涿に返した。それからというもの、村が水害に見舞われることはなくなったという。

またある年、村が凶作で食べ物がなく、餓死する者さえいる始末でみんな困っていた。すると明るる年、山菜採りに行った村人が帰りにたまたま通りかかった神社の池で、たくさんの稲束が沈んでいるのを見つけた。糶不足で困っていた村人たちは、その稲束の糶を持ち帰り苗代に蒔いた。秋になるとそれが黄金波打つ大豊作となり、村人たちは大喜びで「きっとあの河童が種糶を恵んでくれたに違いない」と河童に感謝した。その池は「種糶池」と呼ばれ、今も御稷神社の境内の隅に小さく残っている。



冑神社



4. 円満寺と観音堂・子育て地蔵・出ヶ原和紙

(1) 円満寺と観音堂

寺称を縛日羅山円満寺(本尊不動明王)と号し、真言宗の寺院である。寺の創建についての詳細を知る資料はないが、伝えによると、鎌倉時代初頭の建久6年(1195)、慶観という僧(横田村本城寺賢瑞の弟子)が伊北郷山入村(金山町)に建立後、伊豆ヶ原村(出ヶ原)に移したといわれている。『新編会津風土記』によると、円満寺観音堂は創建から141年後の延元元年(1336=建武3)、芦名盛員の内室が中先代の乱にて鎌倉で討死した夫と子を弔うのに、円満寺の境内に観音堂を建立したとされている。ただし、天保3年(1832)の古文書によると、延元元年以前に飛騨の工匠水口入右衛門によって建てられたとされている。この観音堂は後の文安3年(1446)と天正7年(1579)に修復、慶長16年(1611)の会津大地震で倒れ復興したものとされている。

やがて観音堂は昭和41年(1966)、国指定重要文化財となり、昭和45年(1970)から1ヶ年余りを経て解体移転、修理を施した。移転前は集落中央の円満寺境内跡地にあったが、国指定により保存の観点から現在地に移築し、原形に復したものである。

国指定となっている建造物は、方三間、総檜材、茅葺の入母屋造り。内部は本格的な室町末期の唐様建築手法で、垂木が丸見えの化粧屋根裏、絵様くり形のある木鼻、大瓶束と大虹梁。中央には格天井に來迎柱、造付須弥壇、後方張出し厨子。外廻りは二軒本繁垂木、三斗組の斗共、粽型の総円柱。正面には明和3年(1766)に奉納された扁額と文政6年(1823)に奉納された鰐口がある。



円満寺観音堂

(2) 子育て地蔵と紙漉き(出ヶ原和紙)

移転前の観音堂近くに「子育て地蔵(根深地蔵・夜泣き地蔵)」がある。地蔵様は高さ1.5m、胴回り1.9mの自然石で、地底から出ていることから「根深地蔵」とも呼ばれ、夜泣きを静めさせるための地蔵様でもあり、子どもを育ててくれる子守

り地蔵様である。

いつの頃からか記録にないが、明治生まれの方の話では物心ついた時はすでに語り継がれていて、子を産むとお参りしていたという。「昔、むらに子だくさんの家があった。どの子も夜泣きする泣虫子ばかりで、家業の紙漉き仕事が思うようにできなかった。そんな中、妻は子ども等を残し、急に死んでしまった。残された夫は多くの子ども等を抱えて、嘆き悲しんだ。四十九日の法要も終り、以前から妻が信仰していた観音様(円満寺観音堂)に子ども等をつれてお詣りした。その時、今まで何もなかったところから地蔵様の形をした石がニョッキリと生えていた。これはきっと死んだ妻が泣き虫で困る子を持つ人の悲願を哀れと思し召されて、念力によって地蔵様を出現させてくださったのであろうと、赤い頭巾と赤いよだれ掛けを石にかけ、お詣りを欠かさなかったという。それを見聞きした地区民は、夜泣きする子どもや疳の虫を治したいときお詣りするようになった。」と語り継がれている。今でも赤ちゃんが産まれると赤い頭巾と赤いよだれ掛けを奉納して、子どもの無事や成長を祈願し、毎年正月の元日には家族そろって氏神社・観音堂・地蔵様に必ずお詣りをしている。

さて、子育て地蔵の言い伝えの中で出てきた紙漉きだが、紙漉きの技術は7世紀始めに高句麗から日本に伝えられ、その後奈良時代には全国各地で紙漉きが行われたという。「出ヶ原和紙」についてはいつ頃からという記録はないが、貞享2年(1685)の記録によると、慶長元年(1596)頃には会津地区で「出ヶ原紙」として大量に漉かれていたという。古くは集落にまだ地名がなかった時代に現在の高知県西南部地方に移住し、紙漉き技術を得た者が伊豆の国から来て、紙漉き技術を伝えたという。後にこの地は「伊豆原」となり、現在の「出ヶ原」となったといわれている。

今でいう「出ヶ原紙」は商標登録品として当時その名も高く、広く商用にと売買された。特に会津藩では専用品として公用文書に使われたという。

出ヶ原紙は昭和40年頃まで漉かれていたが、時代とともに廃れ、今はその姿はない。地域の一大事業として会津各地で漉かれていた「出ヶ原紙」。作業そのものは寒中の作業とあって、かなり過酷であったという。



子育て地蔵(根深地蔵)

5. "御蔵入"に隣接する黒沢地域の遺産

(1) 坂内利三郎と黒沢鉦山群の隆盛

坂内利三郎は、元禄3年(1690)9月に金山町玉梨の坂内家五代の二男として生れる。家が貧しいため、滝谷(三島町)の庄屋、山ノ内吉衛門宅に奉公に行き、18歳で年期があけて家に帰るも、良い働き口もなかったため横田鉦山で働き、横田城主山ノ内氏勝との繋がりを持つ。利三郎は24歳の時に黒沢(鈍子岩鉦山)で働き、めきめきと腕を上げ、黒沢一帯の鉦山を支配して会津藩の財政確立に大きな貢献をしたとある。

坂内利三郎の遺書^{のこしがき}の中から、利三郎の事績をまとめると次のとおりである。享保6年(1721)、坂内利三郎は兄新五衛門と黒沢鈍子岩鉦山で働き始め、同11年(1726)、利三郎兄弟は会津藩の江戸屋敷に赴いて金山奉行となり、長坂平左衛門に願って銅板10万3,500枚、一両につき銅板8貫200匁を請け負い、金子100両を受け取った。同12年(1727)、利三郎は会津へ下り、金山御役所より金子50両と米150俵を受け取り、日向倉鉦山を開発した。その翌年(享保13年(1728))に利三郎は姥沢・日向倉鉦山へ江戸職人多数を呼び寄せ、1ヶ月で釜数15(釜床屋は鈍子岩の西に拵^{しよ}えた)、毎月600貫余の銅を吹きたてる。享保14年(1729)には利三郎は銅板10万3,500枚を会津藩に納め、代金1,150両となる。後年、利三郎は鉦山の成功を記し、観音像2体を作り、1体を本家菩提寺の玉梨の常楽寺に納め、もう1体を黒沢坂内観音堂に納めて、山ノ内氏勝の墓も同じ場所に移すも、黒沢分は昭和31年の水害でともに流失した。

坂内利三郎のルーツを調べると、常楽寺にて利三郎兄弟の位牌と観音像を見ることが出来る。ほかに坂内利三郎と繋がり深い西方嶋城主山ノ内氏信の父、8代山ノ内俊安、奥方の位牌も並んで安置され見ることが出来る。

大成坑跡は、昭和21年10月閉山まで300年続いた。大成坑は鈍子岩鉦山の大動脈的な存在であり坑夫の出入り、鉦内物資の運搬、鉦石の運搬などさまざまな役割を持つ一大坑道で、現在も300mぐらい落盤なく残っている。選鉦場跡は大成坑内から運ばれた鉦石を、まずウ



黒沢鉦山跡

インチで最上部に巻き上げ、次にクラッシャーで碎石したあと鉄ボールミキサーにてさらに砂状にし、振動板に流す。ここで鉱石とズリを分離するため、水と青酸カリ・硫酸銅・石灰・砂状になった鉱石等を泡状に流しながら鉱石とズリを分離する。昭和16年(1941)、鈍子岩鉱山も大手資本が入り政府から軍事産業の指定を受け、兵役に行かない男子が徴用され、全盛期には約400人、昼夜3交替で稼働していた。

昭和21年8月、終戦の後に閉山となり、300年続いた鈍子岩鉱山も閉じることになった。現在も当時の面影をうかがうことができる。坂内家の隆盛を物語る異聞として民謡「会津磐梯山」の歌詞の「会津磐梯山は宝の山よ」は「会津坂内さんは宝の山よ」が元歌という人もいるが定かではない。

(2) 黒沢杉峠

杉峠は越後街道の野沢から山口・牛尾・出ヶ原集落を経て黒沢に至るまで、西方街道から御蔵入に通じており、塩の道、そして生活の道でもあった。またこの付近は古くから五大金山と言われ、金・銀・銅・鉛などの採掘などで賑った地帯で、杉峠の存在と生活に欠かせない大きな役割を持つ峠でもあった。杉峠金山で働く人たちが休む峠の茶屋もあり、いこいの場所として賑った。特に6月の大山祭や9月の秋祭など、西方の御蔵入の大勢の人達が杉峠を越え、五三八商店・吉野屋・橋本屋の茶屋・旅籠で一休みし、大滝経由で黒沢(笹峠)越をして、大山祇神社本殿にお詣りに行き来した。

昭和16年頃は戦争により黒沢の鉱山も軍事産業の指定を受け、中央資本も入り、兵役に行かなかった男子も強制雇用として、三島方面からも大勢通勤した峠でもあった。また峠をはさんで黒沢と三島町西方とは昔から縁故関係も深く、生活習慣も共通する点も多くあり、現在もその関係は続いている。

学校関係では明治21年(1888)に下谷簡易小学校ができると同時に黒沢分教室ができ、1~4年生まで学び、5~6年生は西方の学校まで6kmの道のりと峠を越えて通学した。横田鉱山と鈍子岩鉱山で坑夫達の行き来した峠でもあった。また野沢から馬車で黒沢まで運び、峠は西方の人達の駄賃取り(荷上人足)の越えた峠でもある。昭和45年まで電報・郵便物・小荷物等は西方郵便局より配達されていた。

(3)大滝不動堂と面倉薬師堂

大滝不動堂は端村大滝の入口にあり、不動明王立像 2 体が祀られている。1 体は、13 世紀後半(鎌倉時代後半)から 14 世紀(南北朝時代)の制作と思われ、一木造りで内矧りはない。技法的には平安時代など古い時代によく見られる技法だが、会津地方においては鎌倉時代以降の仏像にもよく見られる。各部分を詳細に検討すると、本来の形を見よう見まねで模倣しているような印象を受ける。会津地方で不動明王像が造られる時期は鎌倉時代以降かと考えられる。かなりローカルな作風ではあるが、側面のプロポーションは安定感があり整っており、そこまで制作年代が下るとも思えない。作風、制作年代、信仰背景において、西会津町円満寺観音堂の矧羯羅・制吒迦童子像に近似する。よって 13 世紀後半から 14 世紀、会津地方における造像と判断され、当時の会津地方の密教、修験道の動向、不動明王信仰を考える上で貴重な作例である。

もう 1 体は、江戸時代の制作で、寄木造り、玉眼嵌入、彩色がある。前述の 1 体がおそらく、当初の本尊像(中世作)の保存状態が悪くなったため厨子に納め、新たに造立した本像をその前に安置したものと思われる。素朴な作風から、当地での制作と判断される。不動堂に置かれていた板の墨書には、享保 2 年(1717)に村が主体となって不動明王像を造立したとあるが、様式・作風から見て本像の制作年代と齟齬せず、この銘文の像が本像に当たるのではないかと考えられる。全体に素朴で地方色が強く、後ろ髪を長く垂らし渦を巻く髪型は独特である。

面倉の薬師堂は、文明 11 年(1479)、修験者智光院の建之と『会津鑑』にある。江戸時代、蒲生氏が藩主だった時代の隠れキリシタンと関係があるという説もあり、堂内に薬師如来像と子安観音像(マリア像との説もある)が祀られている。一度火災にあっているらしい。

(4)宮林風穴(別名宮林石、石ぼっこ、狸穴)

たかつとやま
高刀山が慶長 16 年(1611)の会津大地震の際に山頂が崩壊し、その時崩れて堆積した岩々が露出している場所がある。いわゆる風穴となっており、夏は涼風、冬は温風が穴の底から吹き、特に冬はここだけ雪が積もらず、冬期間でも石は苔むしてかつ真っ青である。昭和 40 年頃までは風穴から吹き上がる真っ白な水蒸気は秋の天気を占う観測点となっており、まっすぐ上がるときは晴れ、途中で漂うときは雨と判断していた。周辺には石祠がいくつかあり(天神様・山の神様・愛宕様)、石

灯笼には「文化九歳」(文化9年は1812年)の文字を見ることができる。



宮林風穴

